

第67回指導者会議（コンプライアンス研修会） 報告書（要旨）

公益社団法人 日本学生陸上競技連合

本稿は、標記報告書（第1部と第2部）の要旨です。詳細の内容については別紙報告書をご参照ください。

第1部 講義 講師 工藤洋治 氏（弁護士、学生連合：理事）
テーマ 「指導者・競技者にとってのコンプライアンスとは」
第2部 意見交換会

<開会挨拶> （以下：敬称略）

松本 ビジネスでもスポーツでも、すべての組織の活動は、世の中から信頼され、支持されて成り立っている。そのために組織に求められるコンプライアンス、ガバナンスがある。それを守らなければ組織の活動とか、存在そのものは成り立たない。その観点から3つのポイントがある。①求められる倫理、あるいはコンプライアンスに対する認識を関係する全ての人を持っていること。②その体質化。③PDCA、即ち、繰り返し見直すこと。色々な仕事をやってきて、以上のことが重要である。今日の指導者会議が学連のさらなる発展、競技者のさらなる成長につながることを期待して冒頭の挨拶にさせていただきます。

<提案趣旨>

阿保 第67回指導者会議で「コンプライアンス研修会」を取上げた経緯や演者らの選考、研修会の目的や方法などについて述べた。

第1部 講義 講師：工藤洋治 氏（弁護士、学生連合：理事）
テーマ 「指導者・競技者にとってのコンプライアンスとは」

参考資料（3点）を画面共有して講義を行った。その資料と主な項目を次に示す。講義内容の詳細については報告書をご参照ください。

・第1 「コンプライアンス」とは

- 1 「コンプライアンス（compliance）の意味
2. 指導者・競技者が社会から求められること
 - （1）指導者 ①「選手との関係」、②対戦相手・審判等や競技それ自体との関係、③社会との関係
 - （2）競技者 ①チーム内の選手との関係、②対戦相手・審判等や競技それ自体との関係、③社会との関係

【昨今の特徴】

- 1) 「社会の評価の「振れ幅」が大きくなっている。SNS等で瞬時に情報が拡散し、叩かれる場合は徹底的なものとなる傾向」
- 2) 「かつてよりも、求められる内容が多様化している。そして有名になるほど、求められる水準は高くなる（否応なしに）」

・第2 「コンプライアンス」をどう位置付けるか

- ① コンプライアンスは、「目的」ではない。もちろん、勝利の「手段」でもない。
→ 競技者や指導者が競技者・指導者であり続けるための「前提」
- ② 「勝利・競技者」とだけ並べると、ときに相反する。
あるいは、勝利。競技力とは「無関係」「別物」として、軽視されかねない。

→ 指導者・競技者それぞれが、「勝利・競技力」と「コンプライアンス」に加えて、「第三の価値」を考えることが必要ではないか。

[3つの価値]・・指導者・競技者それぞれが、第一の価値である勝利・競技力、そして二番目のコンプライアンス、これに加えて「三番目の価値」というものを考えることが必要であると私は考えています。

<参考>「企業のコンプライアンスにおいても、「やらされ感」を脱するためには、各人の仕事の意義（＝社会に提供する価値）との関係でコンプライアンスが語られ、認識される必要があると言われている」

・第3 日本陸連「倫理に関するガイドライン」の紹介

日本陸連の「倫理に関するガイドライン」について説明した。

第2部 意見交換会（要旨）

<意見交換会の進め方>

船原 非常に多岐にわたるテーマです。まず、第一歩として工藤先生に講演していただきました。次に日本学連の現状と課題について大西事務局長に説明していただきます。それを受けて栗山強化委員長が提起される問題などを中心に話し合います。そして、関根さん、公文さんが提起されていることについて意見交換します。

1. 「日本学連のこれまでの取り組みと課題」 大西清司 事務局長

太西 スポーツ庁から3年前にガバナンスコードが出て13の原則が示された。スポーツ界はガバナンス面で問題化となったことが背景にある。スポーツ団体には6つの原則。罰則はないが適合審査がある。日本陸連は、これへの対応をホームページにアップしている。NFは女性理事40%以上、外部理事25%以上が求められている。日本学連としては法令遵守で役員に研修させているが、各大学がコンプライアンス教育や考える機会をつくることが重要で、全国の加盟校への啓発も大事となる。地区学連との連携・協同も必要だ。スポーツ仲裁機構のガイドブックも参考にしたい。

船原 中学や高校は改革が進みつつあるが、大学はどうなのか。コンプライアンス研修が重視されていない時期に指導者となった方もいる。虚心坦懐に自分たちが置かれている状況を発言していただきたい。栗山強化委員長、現場の立場から指摘してください。

2. 大学指導者の現状と課題 栗山佳也 強化委員長

栗山 38年間、大学の現場で指導に当たってきた。強化の立場からみた現状と課題をレジュメで示して説明した。注）講義内容の詳細については報告書をご参照ください。

船原 いろいろ難しい要素があり、大学によっても違うと思う。跳躍チームと駅伝チームでも違うように、それぞれ課題が違う。大学の特殊性を踏まえて、工藤先生にアドバイスをお願いしたい。

<意見交換>

工藤 選手は高校まで指導者の依存度が高い。依存する選手もいれば、反発する選手もいて対応が難しい。大学経営という側面もあり、箱根駅伝では結果を求められる。その中での指導は、難しい面もある。

船原 陸上競技の指導者はどういう研修を受けてきたのか。この辺について関根さんにお聞きしたいと思います。

関根 メディアでも、コンプライアンス面で指導者と選手の関係が紹介されている。昔は殴ったり蹴ったりはあったようだ。最近は競技者一人ひとりが考えながらトレーニングしている。やみくもに指導者に頼らない選手が多くなっている。色々なパンフレットも出ており、コンプライアンスへの理解で効果が上がっている。

船原 メディアの目で滝川委員（時事通信）はどのような意見を持っていますか。

滝川（指導者会議運営委員） 第一義的に、指導者がコンプライアンスを理解することの重要性は言うまでもな

い。いじめやパワハラ、セクハラに遭った選手から相談を受けた時に指導者がどう対応し、どういう言葉がけをすればいいのかを、指導者もこれから学ぶべき。例えば、B選手から「A選手からいじめられた」と相談を受けた時に、A選手を呼んで叱るだけではだめ。それだけだと、A選手のB選手へのいじめがますますエスカレートしてしまうという事例もあった。また女性選手からの相談に、どう対応すべきなのか、どういう言葉を選んで聞いてあげるかも、これからは学ぶべきだと思う。

船原 跳躍と駅伝チームでは状況が違うと思いますが、植田さんいかがですか。

植田理事 東海大の場合、週一回のスタッフミーティングで情報を共有している。大きな問題は発生しなかった。跳躍に関しては、指導者から一方的に押し付けるようなことはない。

船原 びわこ成蹊スポーツ大学の渋谷さん、いかがでしょうか。

渋谷理事 私は現役時代に、パワハラやハラスメントを全く受けていないが、他の大学ではあったようだ。200名ほどの部員がおり、それぞれの種目の特性は感じている。私立大学の場合、学生の満足度を高めよと言われる。満足度は結果を出すことだったり、学生によって多様化している。一律に自主性と言っても難しい。

船原 短距離関係の永井立子さん。いかがでしょうか。

永井立子 (指導者会議運営委員委員) 選手だったころを含め、学連としてたくさん事例がある。表に出ていないことが多くあるし、気になっていた。選手には、ちょっとしたことでも優しい言葉で伝えてほしい。男性の指導者が圧倒的に多く、女性の指導者は少ない。男性指導者も、女子選手の発育過程や体のことを理解してほしい。

船原 女性の指導者が少ないということですが、学生の皆さん、地区学連の方々はどう受け止めていますか。

高橋 (関東学連) 中学、高校と選手をやって男性の先生から教わった。男性指導者だと言にくいこともあるし、全てを打ち明けられない。女性の指導者の方が話しやすい。関東学連は女性の指導者が少ない。

船原 現場の指導者は、かなり神経を使って日常の指導をされていると思います。大学の現場で指導なさっている方はいかがでしょうか。岩手大学の清水さん、どうですか。

清水 岩手大学には女子部員はほとんどいませんが、どうやって話していいか悩むことがある。男子部員より女子部員への指導で気を遣う。

船原 実際現場ではどう指導したらいいか悩むと思います。陸上の場合、種目によって違うし別の競技という側面もある。理事の岡崎さん、スピードスケートのトップ選手でしたが、陸上界のことをどう思っているのでしょうか。スピードスケートの例から見て何かありますでしょうか。

岡崎 皆さん現場で努力されていると思いますし、それを続けてほしい。選手に目標を高く持たせるのがいい。各指導者の方々のウデにもよるとは思いますが。

船原 大学によっても、種目によって雰囲気が違う。そのへんは岡崎さん、どうでしょうか。

岡崎 個々の能力・レベルは人それぞれ違う。自信がない人は、自信をつけていかないといけない。人によっては選手よりに近づいた方がいいケースもあるのでは。

船原 この問題は一筋縄ではいかないことが分かりました。指導者が学生との関係をどう築くのか。指導者側にも被害者意識があるのかも知れない。今までのやり取りを受け、工藤先生いかがでしょうか。

工藤 選手に対する言葉がけですが、言っている言葉と悪い言葉がある。ただ、明確な線引きはできない。同じ言葉でもケースによって違ってくる。それぞれの人が経験や悩みを出して、お互い参考にし合うことも必要。根本的な理解がまず大事。今後は、具体的な部分を考えるきっかけとして意見交換が必要であると思います。

松本 企業でも、収益よりもお客様のために何をやるのかという意識が大切。どんなに凄いいチームをつくっても、社会から応援してもらえないことがあると、逆になり全て無になる。今日の会議を聴いていて、苦労しているのは皆さん一緒だなと感じた。

船原 次回への方向性が見えてきた。残りの時間は、二人の方に提起してもらいます。

3. 競技会開催に向けての条件整備—コロナ禍での対応— 関根春幸 競技委員長

関根 競技運営面では、安心安全な大会にしていくということになります。コロナ禍の中で大会運営がスムーズにいくためにも、三密回避や応援自粛が必要になります。昨年、埼玉で、参加者が多く三密回避を徹底できず早くトレーニングを切り上げてもらった。社会に対する（に理解を得られる）コンプライアンスを真剣に考えていけないといけない。

船原 関根さんのお話しは、各地区学連でも必須でしょう。地方学連の方、運営面でいかがでしょう。関西学連の高重さん、コロナ禍の大会運営に関していかがでしょうか。

高重（関西学連） 関西でも体調管理の徹底を図ったが、入場IDの不正利用というトラブルがあった。駅伝でも応援自粛をお願いしたが、大学OBが会場に来ていた。大学に厳重注意する事例があった。

船原 今後、こういうテーマで、地区学連と合同の研修を進めていきたい。

注) 資料：「競技会開催に向けての条件整備—コロナ禍での対応」は、参考資料をご参照ください。

船原 公文さん、学生の活動の報告をお願いします。

4. 指導者・競技者へのコロナルールの求め方について 公文ころ 学生連合幹事長

公文 日本インカレで情報がうまく伝わらなかった。公式HPやSNS、メールで情報伝達したが、日本陸連のコロナガイドラインがしっかり伝わらず、サブトラックを1時間早く切り上げざるを得なかった。大学に伝わっても、個々に伝わっていなかった。HPの情報は全てメールでも（個々に）発信していきたい。

船原 末端に伝わらないのは、やらされている感が強いからなのかな。どうやって一人ひとりの自覚を深めていくか。研修等を重ねていくしかない。学連幹部だけでなく（自覚を全体に）広げていく第一歩になった。今日のやり取りはスタートライン。日本学連として今後どう進めていくのか。現場の先生も、悩みや腰引けているところを出し合って情報交換する必要がある。

注) 資料：「指導者・競技者へのコロナルールの求め方について」は、参考資料をご参照ください。

5. 日本陸上競技連盟の指導者養成指針

船原 陸上競技の指導者養成資格はどうなっているのか。法政大学の山本浩さんを中心に日本陸連が進めており、素案みたいのが出ている。七種競技など現役で経験している磯貝さんに話していただくのもいいのでは。山本さんに出ただけなど、他にも（講師候補が）いるので、学生さんと（研修会を）設定していきたい。コンプライアンスに関し情報交換もしていきたい。

（注：資料：「日本陸上競技連盟の指導者養成指針」は参考資料をご覧ください。

司会 参加者のチャットでのコメント（紹介） 杉山先生から、「内容的に非常に分かりやすく良かったです。可能な範囲で諸外国の状況、コンプライアンスに関する啓蒙等を可能な範囲で教えて頂ければ幸いです」というコメントがあった。こちらは継続とさせて戴きます。本日は、たくさんの方から発言があり、大変有意義だった。

<まとめにかえて>

阿保 今後、報告書を作成し、日本学連のホームページに掲載する。皆で一緒になって考えていきたい。その方向性が示された。約1万8000人の学生アスリートがいる。魅力ある陸上競技にしていきたい。それを考える手掛かりとなった。これで倫理委員会にバトンを渡せる。

<閉会挨拶>

永井 コンプライアンスという言葉がよく分かっていなかった。日本学連として早急に取り組まなければならない問題。工藤先生の講演を聴いて、何となく幅広く捉えることができた。女子選手と接する時、神経を使った。今後も、これらの内容を捉えていきたい。新しい観点で（の問題提起もあり）、大きな前進となった。

司会 第67回指導者会議を終了させていただきます。ありがとうございました。

以上